平成23年度留学生交流支援制度（ｼｮｰﾄﾋﾞｼﾞｯﾄ）採択ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ参加ﾚﾎﾟｰﾄ

貧困って何？

桜美林大学ビジネスマネジメント学群　野田 隼太
Hayata Noda

2011年8月13日から9月2日まで本学のフィリピン国際協力研修に参加しました。私はこの研修に参加した理由が、当初ははっきりしていませんでした。途上国のゴミ山やスラム街、貧困の状況をテレビのニュースや新聞で見ても毎日記事で取りあげている訳でもなく、自分で深く調べようという気持ちもありませんでした。また、そのような事態が起きている現場へ実際に赴き、自分の五感を使って体験したいという願望も特にはありませんでした。さらに、大学へ入学してからは、幼い頃から夢であった航空関係の勉強をずっとしていました。航空業界も、飛行機で世界を繋げていると言えば国際協力に関わる職かもしません。しかしそれは私がイメージしている国際協力ではありませんでした。研修へ行くための面接の際、「なぜこのプログラムに参加したいのですか？」と問われても、明確な理由がありませんでした。ただ実際に現場へ行くことで何か見つけられるのではないか、全く自分が関わっていなかった分野に関わることで新たな自分が見えるのではないか、という心持ちはありました。結果から言うと、私は今回の研修を経て、自分の将来について悩むほどの体験をしました。

都市研修では、フィリピンの貧困状況の講義をマニラのアテネオ大学で受けました。そこでパヤタス地区で起きているゴミ山の問題や、フィリピン政府が決めている貧困ライン、また途中退学する生徒が多い教育問題、多くのフィリピン人が職を求めて海外へ行ってしまう傾向など様々な問題が挙げられました。しかし、データ上だけでは「貧困」を実感することはできません。その後、都市研修でパヤタス地区にある小学校や、Virlanie Home（ストリートチルドレン保護施設）、パヤタス周辺を訪問しました。施設の子供たちの姿はあまり日本の子供と変わらず、彼らは素直で人懐っこく元気が有り余っている様子でした。しかし、その子供たちもストリートチルドレンや家庭の事情など、様々な重いものを抱えてここへ来ていると考えると、複雑な気持ちになりました。

ストリートチルドレン保護施設の無邪気な子供達の様子

ホームステイ先の漁村の海岸に打ち上げられた大量のゴミ

環境問題に関しては、パヤタスの小学校周辺では衛生状態がとても悪く、ゴミが多いせいか異臭が漂っていました。例えるならば、ゴミ収集車のトランクの中にずっといるという感覚でした。また交通量や排気ガスも多く、子供たち

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

子供達に日本語を教えている様子

が通うには決して適した通学路とは言えませんでした。小学校の内部は、日本の小学校に比べれば設備は劣りますが、筆記用具は一人ひとり持っており、机やいすも各一人にありました。とにかく彼らは先生の言うことをよく聞き、学習に関しても本当に色々なことを学びたいという姿勢が伝わってきました。私たちは三人一組のグループに分かれ、各教室の担当を任されました。そこで私たちは4～5年生の生徒に簡単な日本語を教えました。皆一生懸命私が書いた黒板の字を写していました。しかし、現実は家庭の様々な事情で65%程しか卒業できず、途中でドロップアウトする生徒も多くいます。

また、パヤタス周辺では、貴重な体験をしました。まず、2000年に起こったゴミ山崩落事故現場へ行きました。今ではそのゴミ山に草や木も生えており、小さな山になっていました。その事故があってから、第二のゴミ山は規制が厳しく、私たちはゴミ山の周辺までしか行くことができませんでしたが、その周辺で暮らしている家族にインタビューをすることができました。私はこのインタビューを行って、初めて「これが貧困なのか」という実感をしました。今の生活に満足していない、物質的にも不足している、この負のサイクルに一度入ってしまうとなかなか抜け出せなくなるということも理解できました。自分が日本で当たり前だと思っている生活に疑問を感じなければならない、またこのような現実が日本から飛行機でたった4時間弱の場所にあるということを、もっと多くの日本人が知らなければならないと思いました。私は19年間､こんな現実があることを知らずに生きてきたと思うと､自分がとても情けなく、小さく感じました。「物質的にも精神的にも満足していないことが貧困」。これは私が前半の都市研修を経て、自分なりに出した貧困の定義です。

後半のバターン州の研修では、バターンのオリオン町にあるカプニタンという小さな漁村に、自分自身で貧困を見るという目的で5日間のホームステイを行いました。日本に比べると、水道が通っていないことや電力が頻繁に落ちるなど、インフラ設備が不足していました。また、海岸に大量のゴミがあり、その海岸の上を子どもたちが裸足で遊び回っている光景も目にしました。物質・環境面では欠けている部分がありました。しかし、周辺の人たちに「毎日楽しいですか？」という質問をすると､「毎日が幸せ」と答えます。私はここで、貧困とは一体どういうことなのか、何を基準に貧困と言っていいのか、再び考えさせられました。

都市・地方研修を通して、今回、私が日本へ帰国してからも後悔していることがあります。それは、私が日本人という視点からでしか物事を見ることができなかったということです。また、私がフィリピンで見た現実は、将来国際協力に携わる仕事をしたい人だけが学ぶのではなく、どの分野で働く人も一人の人間として必ず知らなければならない事実だと初めて気づかされました。だから、これから国際協力を勉強していく上で、日本人であるということは忘れないけれども、今の生活が当たり前という考えは捨てて、さらに様々な国へ行き、その国が抱えている「貧困」について考えていきたいです。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.